

# 地域と企業

秋 田 清

Enterprise Behavior and Local Society

Kiyoshi AKITA

## I. はじめに

今回の公開講座は大分県経済同友会にお願いしまして、同友会の人材委員会の方々にお話をして頂きました。驚きましたのは皆さん業種も地域もまったく違ったところでお仕事をなさっているにもかかわらず、共通の問題関心の下にお話をして頂いたことです。

中小企業の前線でご活躍の方々から、「利潤の極大化ということでは企業は動いていません」ということをこれほどはっきり聞けるとは思いませんでした。中小の企業がお互いに助け合ってという意味での「共生」は容易に想像できますし、多くの例があります。しかし、地域社会や外的自然との共生を今回ほど強調されるとは思っていませんでした。「共生」ということが最近の研究会のテーマであるということ、なるほどと思いました。また、変な言い方ですが、前回の講義で、地域社会や自然との共生とか言っても、営利企業として経営がなりたったうえでのことです、という発言もあって、ちょっと安心もしました。

今回の講座のまとめとして、営利活動と共生ということについて、話をしたいと思います。話の順番としては、今回お話をいただいた内容について振り返ることから始めるべきだと思います。しかし、私の頭の中は別のことが占領し

ていまして、その話を吐き出しておかないと、どうも頭が上手く回りません。それで、先週木曜日と金曜日に東京であった、全国大学・短期大学実務教育協会の研修会で話題になったことから話を始めさせていただきます。

## II. 「組織から個人へ」あるいは能力主義とは何か

研修会のテーマは2つありました。一つは協会が、来年度から秘書士と情報処理士のほかにビジネス実務士というのを導入しようとしていまして、これをめぐる議論が一つ。もう一つは、企業が求めているビジネス実務能力とは何かをめぐってでありました。

両方とも、最近の資格社会とか、能力主義とか言われている事態にどう対応するかということでの議論です。協会の意図としては、これまで、学生個人の人間の成長を秘書教育という形で行ってきたが、これからは就職後、企業において組織の一員として仕事のできる、責任能力のある学生を育てようということのようです。

われわれも、名称はともかく、内容上は協会が提案したようなことを考えていましたので、大枠としては異を立てる気はありません。しかし、何を持って、ビジネス実務能力というかについてはずいぶんと差があるようにおもえました。少なくとも、われわれが教育しようと思っ

ていることとは随分違いました。とりわけ、参加企業からの要請は拒否せざるを得ないとも思いました。

ここでは、地域と企業という今回のテーマと関係ある限りで、企業からの要請について問題にしたいと思います。

これはシンポジウムのII「問われるビジネス実務能力 ― ビジネス現場からの提言」として行われました。参加者は次のとおりです。

- 座長 佐藤 啓子 (常盤大学短期大学部)
- 堤 幸男 (株式会社 内田洋行)
- 小籠 和子 (株式会社 ミスミ)
- 重松 郁也 (株式会社, ベネッセコーポレーション)
- 風戸 修子 (産能短期大学)

3社がオフィスワーカーに求める資質や実務能力は次のようなものでした。

\* 内田洋行は情報リテラシー、コスト意識、人と人との関係能力(顧客対応プレゼンテーション力)、創造力をあげます。

\* ミスミは「目的意識を持った企業参加と自己責任・自己選択によるキャリアアップ」を基本としてあげ、「プランニング能力、プレゼンテーション能力、OAスキル」を具体的能力であると、何よりも「知的生産者」がほしいといっています。

\* ベネッセは「事業の成長と個人の成長の同時実現を」かたり、次のようなことを基本的なスキルであるとします。

- ① 問題を把握する力  
⇒状況(情報)を認識(選択)する力
- ② 問題から課題を生成する力  
⇒構想力、仮説形成力
- ③ 課題を解決するための力  
⇒代替案を作る力, Plan/Do/See
- ④ 周りを動かす力  
⇒プレゼンテーション力、影響力
- ⑤ 仕事の基本 ⇒約束を守る、報、連、相  
またこういうことを考えて、採用面接で感じる  
こととして、次のようなことをあげます。

\*自分を自分の言葉でかたる学生が少ないこと。

自分の価値を自分らしく表現できない。

\* 価値観の転換が要求されることに気がついていないこと。

例:生活者→生産者、嗜好的思考→合理的思考

\* 主体的意思決定力に力をつけること。

どのような価値観や判断に基づいて、就職という人生の節目に望んでいるか語れない。

耳の痛い話です。言葉で表現する限り意義はありません。私たちも常口頃同じようなことを、学生たちに話しているようにも思えます。学生諸君は、決してそれを理解しませんし、耳をかた向けようとしません。それは、一般の聴講者の方が同じ教室で講義をお聞きになって感じられるとおりです。

ともあれ、能力主義と言う点で、もっとも徹底している株式会社ミスミの年間の活動手順を見てみましょう。

<徹底的な能力主義による創造的ワークスタイルの追求>

### ユニットリーダーのプレゼンテーション

役員がユニットリーダーとしてトップマネジメントとチームで新年度事業プレゼンテーションを行う  
<新年度事業とユニットリーダーの選択>



### チームリーダーの公募

採択された新年度事業の各チームリーダーを募集する。リーダーは社員だけでなく一般にも募集する。  
<社内外にチームリーダー公募>



### チームリーダー立候補者のプレゼンテーション

チームリーダー立候補者が、自分が練り上げたタスク構想と実行計画をユニットリーダーにプレゼンテーションする。  
<ユニットリーダーがチームリーダーを選出>

↓  
**チームメンバーの公募**

社員はチームへの参加希望を第3希望まで出す。チームリーダーは希望者の中から、厳しい市場の原理で、メンバーを選出する。

＜チームメンバーの選出＞

↓  
**チーム活動の開始**

決定したチームで事業活動を開始する。ただし、業績が芳しくないときは、半年で活動を停止することもある。

＜事業の展開＞

↓  
**チーム活動の評価**

チーム活動の結果を評価する。1位から最下位まで順位づけし、収益の一部分を、実績に基づきチーム毎に比例配分する。個人の人事評価は、市場価値としての年俸制を基本に、チーム活動の結果を参照して再評価する。

こうした活動スタイルを取っている企業の中では、とりわけプレゼンテーション力が重要になりますが、その能力について次のようなことがあげられています。

**プレゼンテーションを成功させるための実務能力**

- \* 情報収集力、情報分析力、情報評価力、情報活用力、OA機器操作力  
＜情報を集め、分析し、評価し、活用する能力＞
- \* 調査力、マーケティングリサーチ能力、対人折衝力、ネットワーク力  
＜情報を集めるためにネットワークを形成し、リサーチする能力＞
- \* 説得力、表現力、話力、ディベート力  
＜集めた情報をわかりやすく説得力豊かに話す能力＞

\* 自己管理能力、自己完結能力

＜企画を練りあげ、まとめるための自己責任能力＞

一々もつともなことです。しかし、今回私はビデオを見、ベネッセの方の話を聞いていて、この短大の学生たちの、いいかげんさ、だらしの無さがとても人間的なものにおもえてきました。おそらくここにはまだ可能性がある、と思います。

ビデオを見ている間中、卒業生たちが次から次に私の頭の中に現れて、一言ずつ呟いていきました。「あの人たち馬鹿じゃない」とか、「何にも考えてないね」とか、「かつてにしな」とか、「寝言こいてろ」とか、「先生、拍手」などとかからかっていく学生も居ました。

各社、とりわけ、ベネッセの労働者が仕事を通した自らの生きがいと、キャリアアップについて語るとき、私は思わず「おまえらオームとどこが違うんだ」と呟いていました。

『報告書』（全国大学・短期大学実務教育協会編『企業実態報告書』1997年3月）も次のように指摘しています。

「ミスミの自由競争、市場原理の徹底的な導入が、継続的な付加価値創造にどれだけ結びついているのだろうか。ミスミは現在の所、メンバーが当事者意識を持ち、提案型のワークスタイルを追求しているので、プラスの結果を出していると思われるが、こうした競争の原理は、競争の過剰な進展により、逆にワーカー自身のゆとりを奪い、豊かな創造力をなくしてしまうという結果に陥る可能性もある」（23頁）。

これらの能力も、それ自体としてみれば、何ら否定すべきものではなく、企業や社会でそれなりの仕事をしていくためにはむしろ望ましい能力であります。しかしこれに全精力をつぎ込んだとき、事情は一変します。組織の一員としての個人から、自律した個人へという時、その個人がもはや全人的な個人ではなくなっており、企業の利潤の極大化を己の唯一の生きる目標にしてしまった人間であります。悪魔に身も心も売り渡すことによつてのみ存在している個

人に過ぎない。それはすでに自ら思考する産業ロボットでしかない。彼らが求めているものは、その限りでの知的（痴的？）生産者なのです。

私はマルクス（Karl Marx）の言葉を思い出します。

「労働者は彼の生命を対象のなかへと注ぎこむ。しかし対象へ注ぎこまれた生命は、もはや彼のものではなく、対象のものである。……彼の労働の生産物であるものは、彼ではないのである。したがってこの生産物が大きくなればなるほど、労働者はますます自分自身を失っていく」（『経済学・哲学草稿』岩波文庫、88頁）。

働き甲斐とか生きがいとか、キャリアデザインとか言うのも、家族や友人や地域の中での具体的生活を抜きにあるとは私には思えません。企業が生き残るために何をやろうと、そこに参加している経営者や労働者が、自ら望んでやっている限り、それは過労死しようと狂い死にしようと、本人たちの勝手であります。それに文句をつけようという気はありません。しかし、それが唯一の正しい生き方みたいにいわれると、それは違うと言いたくなります。少なくとも私はそんな世界とは別の世界にいます。

ただ救いはベネッセが、所詮自分たちは偏差値稼業だということを自覚していること、内田洋行が企業が多くの病人を生み出していることを問題点として自覚していることでした。

### Ⅲ. 近代社会における個人

先に述べたように、「情報を集め、分析し、評価し、活用する能力」、「企画を練りあげ、まとめるための自己責任能力」、これらのことが単なる組織の一員としての個人ではなく、自立した個人として必要な能力であるといわれると、さしあたりそのとうりだと言ってもかまいません。しかし、そうした能力の内容が問題であります。どんな情報を、何のために集め、いかなる企画を立てているかが問題です。それが、「企業社会」の論理、つまり利潤獲得を自己目的化した企業の論理を前提にして語られ、そう

した企業の論理の中で語られた「自立（律）した個人」を一般的価値であるかのように言われると、それはちょっと違うといわざるをえません。

確かに「自立（律）した個人」の成立をもたらした要因として、商品交換や企業活動の力は大きく、それによって形成されたといつてよいほどかもしれません。しかし、上に見た3企業で語られるのとは少し違う気がします。

私がかえがくのは、たとえば、フランスのかばん屋さんで、2年も3年も先まで注文が溜まっているのに、機械化したり、他の人に作らせたりしないで、客が期待しているとおり自分で作りつづけるかばん屋の姿です。大量生産すれば、もっと儲かるかもしれないが、品質を維持するためにかたくなに技術を守り続ける彼らの姿です。もちろん、見方を変えれば、彼らが大量生産に踏み切ったとしたら、彼らの商品の独自性がなくなり、しばらくはともかく、長期的には儲からなくなるということはあります。しかし、そうした事実を考慮した上で、「金もうけが目的ではなく、自分の作ったものを喜んでくれる人のために鞆を作りつづけられることが自分の喜びだ。金は食えるだけあればいい」と語る彼らの言葉を私は信じたいと思います。私はそういう場で生きて行きたいと思います。

西洋近代が生み出した個人主義のなかに、日本で言う職人かたぎにあるものと共通のものを私は見たいと思います。「労働全収権」という考え方が、個人主義や、自立の思想の基礎を成したことの意味はここにあります。

すなわち、一人ひとりが、自分の労働によって得たものは自分のものだと思え合い、他人のものがほしければ、自分の労働によって得たものと交換することによって手に入れ、生計をたてていく。その限り互いに依存しあってはいるが、他人の労働によって作られたものも、自分の労働によって作ったものと交換することによって手に入れている限り、他人に支配されずに、生きて行くことが出来る。経済的な自立が、人格としての自立の基礎となっているわけです。

しかし、交換手段としての貨幣が、富の一般

的な形態となり、その獲得が自己目的化されるようになると、事態は一変します。神からの自立の有力な武器であった近代科学は、新しい神＝貨幣に奉仕するものとなります。

西洋近代は、その精神史においては神からの自立の過程でもありました。すべて神の摂理のまま、運命のままに生きる以外になかった人間は、理性の力、実験と観察、法則の発見という近代科学を発展させることによって神からの自立を勝ち取ってきました。しかしこの近代科学の発展は、とりわけ、その技術への応用、産業化として発展してきました。つまり、新しい神＝貨幣に奉仕する形でしか発展し得なかったわけです。

確かに、このことを通じて、われわれは、こんにちの物質的豊かさを勝ち取ってきました。しかし、もはや、これ以上の物質的豊かさや、発展は、価値たりうるのでしょうか。企業の生き残りへの過度の努力は、人々の生活とあまりにもかけ離れていないのでしょうか。かつてマルクスは「利得を得る行為ではなく、利得の獲得そのものに人々の関心が向かう時、社会は崩壊の時を迎える」といっておりましたが、上の3企業の報告を聞いていて、私はこの言葉を思い出しました。

株式会社ミスミは商社ですが、金型を主に取り扱っているということです。彼らは右のものを左に移すことで金もうけをしているわけです。それが金型であれ、おもちゃであれ、食料であれ、その内容にさしたる関心を持っていないように思えます。関心を持っているとすれば、どれを扱えばより利潤獲得にとって有利であるかということでしょう。

金型を作っている企業で、「ムネカタ」という企業がありますが、その社長である宗形年潤(トシヒロ)氏は経営理念として、「民族の平等、全員経営、人権の尊重、労働の公正な評価」というのをあげています。多少古臭い感じがしないでもありません。また理念はあくまで理念です、しかし私はここに物を作っている企業人の慎慮を見たいと思います。

ヒトは自然の中から生まれ、その生命を維持

するために、自然との物質代謝を欠くことは出来ません。頭脳を発展させ、観念の世界に遊ぶことが出来たとしても、所詮肉体を持って、肉体が活着している限りで存在できるに過ぎないわけです。人間の内的自然は外的自然から自由になれるわけではなく、その流れに即して生きる以外にない限界を持っています。人間が人間らしく生きるためには、それが農業であれ、製造業であれ、物を作るという行為、それを配分し、消費すると言う行為から遠ざかり得る限界があるように思います。

たしかに、他面では人間は観念の生き物でもあります。そのことによって、さまざまな制度を発展させてきました。単なる物々交換から外国貿易や世界的規模での金融制度にいたるまで、人が観念の生き物であることを抜きには考えられません(おそらく、逆もまた言えますが)。しかし、ものを右から左に動かすことも、その両端に具体的な生活者としての人間の顔があるかどうか、少なくともそれを意識しうるかどうかが、重要な気がします。

#### IV. 地域と企業

今回、大分県経済同友会の人材委員会の方々に講義をしていただきましたが、それぞれ、地域社会における自らの企業の役割、そこで働く人々の生活のあり方と地域の人々の快適な生活の確保のための経営努力に深い感銘を受けました。以下、1, 2例をあげて、今日の話を終わりにしたいと思います。

みらい信用金庫の高松理事長は、「別府信用金庫」から「みらい信用金庫」への社名変更の過程における社内での議論について紹介されながら、地域社会の中で生きる金融機関の役割を強調されました。以下、当日の講義資料とみらい信用金庫のホームページから引用します。

これは、「みらい信用金庫」の“思想”です。

信用金庫は“地域の人々のための、地域の金融機関”であり、地域の発展に貢献し、地域の生活者の豊かなくらしづくりに奉仕することが使命です。そのために、地域に深く根

を下ろし、今日を精一杯生きること、地域の人々の“未来”の繁栄と幸福を“拓いていく”ことが願いです。

地域との「共生」を“みらい宣言”し、高い理想に向かって“行動と挑戦”をつづけていくことを決意しました。

しんきん

信用金庫だから、地域の人々の希望と信頼にお応えします。

信用金庫だから、チャレンジする起業家を応援します。

信用金庫だから、世界に学び地域の明日を担います。

信用金庫だから、誇り高くいきいきした職場をつくりまします。

信用金庫だから、地域と共に生き続けます。

たしかに、高松さんがおっしゃっていたように、「信用金庫（しんきん）だから」という言葉ははずすと、一般的な企業の常識的な努力目標になります。しかし、「信用金庫だから」という業種を表した自らの社名が入っていることによって、それは単なる決意表明ではなく、具体的な活動の指針になっています。高松さんの話では、「信用金庫だから」という一言を入れるかどうかで、大議論をしたということでした。

どこから、どのようにして預金を集めるか、集まった預金をどのように運用するか、どこにどのように貸出しをするか、日々の企業活動に具体化されざるを得ない経営理念をそこに見ることが出来ます。

また、協栄工業（株）の佐藤社長は、「自分のためではなく、従業員のために後を継いでくれ」という奥さんのお父さんの言葉に、断りきれずに引き受けることにしたと、協栄工業を引き継がれた経緯を話されながら、次のようなエピソードを紹介されました。

ある日、昼休みに、子供たちには自分たちと同じような生活をさせたくないというような話を、従業員の人たちが話していた。子供たちには、もっと豊かな生活がさせてやりたい。そのためには大学くらい出ることが必要

だ。そのためには、金が必要。どうするか。

自分たちも資格を取ろう、ということになり、仕事が終わってからみんなで、国家試験のための勉強会をした。仕事が終わって疲れた体に鞭打って勉強した。その甲斐あって、何人かの人が合格した。合格した人の中で、高校しか出てない人もいたが、その人は人と同じだけやっていたのではだめだと思って、みんなでやる勉強会が終わって、家に帰って、それからまた、勉強した。

資格が取れたので、みなで話して、名刺を作って、配管技能士一級の肩書きをつけた。それを工事現場で配って挨拶をするようにしたら、現場での他社の人々の見る目や言葉づかいが変わった。それまで、「おい、水道屋」とよばれていたのが、「協栄さん」にかわった。仕事に張り合いが出来たし、その後も資格試験に合格する人が次々に出て、会社の信用も増し、仕事も増えた。それまで、下請けがほとんどだったのに、直接の注文も増えた。別府のビーコンプラザの工事では、地元の会社では、協栄工業だけが直接の注文が取れた。大筋以上のような話をされていました。会社は従業員のためにある。企業はそこで働く人々が生き生き働くことが出来て初めて存在するに値する。企業はその仕事を持って、地域社会に役立つと共に、あるいはそのままに、そこで働く人々の生きがいを組織できるものでなければなりません。

私たちも、そのような地域の企業で働くことの出来る学生を育てたいと思います。多くの学生は、全国企業だの、土、日休みじゃなければ、などと言ってますが、中には面白い学生も居ます。

ある時、銀行受けます、という学生が来ました。あなたには銀行は向かないから止めたがいい、と言いました。でも、彼女は、自分もそう思うけど、他の先生に勧められたので、一応受けますというので、推薦文も書いてやりました。試験が終わって、だめでしたと元気にやってきました。しばらくして、JRのナントカレディを受けますといつてきました。私など、頭では

いろいろ考えますが、感覚的には古い人間ですし、職業にも差別感が残っています。彼女は商経科の総代で卒業した学生です。何もそんなとこ受けなくても、要するに売り子でしょう、と言いました。彼女はケロツとして、先生、あれ制服カッコ良いんですよといひます。3月の初めから実習に行つて、20日の卒業式に出てきて、仕事が面白くてたまらないと言ひます。自分の声のかけ方次第で、売り上げが、2、3倍違う。それが面白いと言ひます。それからしばらくしたら、今度は、先生私新聞に載つた、といひて、新聞を持ってやつてきました。シリーズで新入社員の紹介をやつてゐるような記事でした。卒業して3年になりますが、相変わらず実に楽しそうに勤めてゐるようです。

もう少し前の学生ですが、こんな学生もいました。彼女は、自動車の販売店に勤めたのですが、文章の上手い学生でした。新入生向けのパンフレットに、先輩からということ何か書いてもらひました。出来上がったものを販売店の店長に見せたら、感心して、文章がかかるなら、店の宣伝のリーフレットの文章も書いてくれといわれたのだそうです。これが気に入られて、店全体のレイアウトや装飾までまかされて、楽しくやつてゐたようです。しばらくしたら、ホテルの宣伝入りのはがきの挨拶状が来て、ホテルに転職したことを知りました。そこでもイベントを企画したり楽しくやつてゐるようです。

また、信用金庫と有線放送とどっちにしようか迷つてゐるけど先生どう思うか、と相談に来た学生がいました。どっちに行きたいの、と聞くと、親は信用金庫にしろと言つてゐるけど、自分は有線放送に行きたいと言ひます。じゃ、相談するまでもない、私も親だったら、信用金庫にしろと言ひかもしれないけど、自分がいいと思ひ方を選んだ方がいいと答えました。彼女は有線放送に就職して、面白くないと言つて3ヶ月後に止めました。その後、世間で言うチャンとした会社に就職したと言ひ話を聞いてゐましたら、今年の春には、個展をやりますといひはがきがきました。

これがまたいかにも内の卒業生らしく、「個

展をやります、場所はクレヨン」としか書いてありません。画廊かなにかかと思つて電話帳で探したら、喫茶店にクレヨンと言ひのがありました。電話で場所を確認して行つてみると、2階が喫茶店になつてゐる1階の土産物売り場の一角に、色紙や葉書絵風のものゝ並んでゐました。「何が個展か、大袈裟な」と思つてゐましたら、側に置いてある大学ノート4、5冊にびつしりと落書きがしてありました。そこには、遠くは関西から来た若い人たちが「私はあきちゃんのファンです。いつもあきちゃんの絵を見て励まされてゐます」とか、「心温まる絵をありがとうございます」とか書いてあるわけでした。もつとも、「いつも、個展だから見に来てといわれて、迷惑してゐる」といひ、卒業生仲間の陰の声もあるのですが。

おそらく彼女にとっては、勤めてゐる会社は、そこでもそれなりに楽しんでゐるでしょうけど、一定の収入を得るための場所で、絵を描いたり、字を書いたりすることが、毎日の生活なのです。そうして生活を楽しむと言ひ観点から、自分の周りのすべてを組織してゐる。そこに彼女の独自の世界があるわけでした。

こうした卒業生たちの生活を鏡にしてみると、最初に紹介した企業の労働者たちの「キャリアアップ」など、子供だましにもならないようなものです。

近代社会の人間たちは、田舎より都会が良く、地方より中央が良く、国内より世界が良く、物質的なものより精神的なものが高尚と普遍的なものを求めてきました。しかし、そんなところで、金や名誉を競ひ合つたり、勢力を競ひ合つたりすることにどれほどの意味があるのでしょうか。そこで成功する人はそれなりの意味を見出すことが出来るかもしれませんが。しかしわれわれ普通の人間たちは、身の程を知つて、自分の好きなこと、やりたいことを見つけて楽しむ、そして、そこでチョットでも他人の役に立つて、ありがとうと言われたら、うれしくなつて、その日一日楽しく暮らせるといひのが一番いいように思ひます。そういう個人の暮らしを中心に企業のあり方などを考へて行く

わけにはいかないのでしょうか。

私の友人で、われわれの周りで現在起こっている問題、環境や福祉などについて考えていたら、結局、人類という一つの動物種が余りにも多く増えすぎたことにすべての問題の原因があるということに気づいた、といている人がいます。

少なくとも、人間の傍若無人な振る舞いが、その数の異常な増大を含めて、自らの危機を生み出すまでになっているということはいえるよ

うに思います。地球を人間の論理、それも、物質的豊かさとするすべてのものに対する支配欲、というただ一つの論理で支配しようとしている人間に、未来はないように思います。今なされている環境保全についての努力も、人類が減びるのを100年か200年伸ばすのに役立つぐらいがせいぜいでしょう。あまり不様な減び方をして、人間が減んだ後に栄えるかもしれない種、ねずみやゴキブリに笑われないようにしたいと思います。

[註]

平成9年度の公開講座は下記のとおり

別府大学短期大学部〔生涯教育講座〕

平成9年度前期公開講座  
地域社会論

新しい地域作りが模索されています。そうしたなかで企業活動は、ひとびとの地域生活の場として、そのあり方が問い直されています。

本講座は大分経済同友会人材委員会に企画を依頼し、地域の企業の新しいあり方について講義をしていただくことにいたしました。

月	日	講	師	テ	マ
4	22	本学教授	横山 泰治	曲がり角の日本社会	
5	06	高山活版社専務	高山龍五郎	仲間からみんなへ～21世紀は共生の時代～	
5	13	大分みらい信用金庫理事長	高松 右門	新時代における中小企業のあり方	
5	20	マリーンパレス館長	川原 大	環境問題の枠組み	
5	27	栄大商事社長	棕野 建二	大分における流通業界の変貌	
6	03	亀の井別荘社長	中谷健太郎	耳鳴りのようなもの… 地域文化論	
6	10	富士通 大分支店長	川津 正史	イントラネットが職場を変える	
6	17	ベツダイ社長	須藤 公繁	バブル後の不動産業	
6	24	大空洋紙店社長	大空 学	地球にやさしい紙パルプ産業	
7	01	協栄工業 社長	佐藤 総一	地域社会と企業の役割	
9	02	岩尾 社長	岩尾 久一	私の天職	
9	09	本学教授	秋田 清	新しい地域生活の息吹き	

ところ： 別府大学大分キャンパス・本館101教室（聴講料無料）

とき： 火曜日 午後1時30分～3時